建築・まちづくりから生活文化を探求する情報誌［リクシル・アイ］

LIXIL eye

13
JUNE
2017

特集

建築のまちを旅する 01

倉敷

幻の建築家・薬師寺主計の足跡をたどる

JUNE 2017
no.13

LIXIL eye

［リクシル・アイ］

表紙の写真

〈有隣荘〉軒先

設計｜薬師寺主計
設計指導｜伊東忠太（和風部分）

有隣荘は倉敷の実業家・大原孫三郎が建てた大原家旧別邸。緑黄色の釉薬瓦が特徴的で、大阪・泉州の瓦工場で陶器窯を使って特別に焼かれた。瓦の独特の色は、内装や家具のデザインに携わった画家・児島虎次郎の提言によるものと言われている。向かいの白壁はその大原家の本宅であった住宅

［写真：石田 篤］

左写真

〈有隣荘〉1階和室の欄間

材は屋久杉。龍のデザインは児島虎次郎によるもの。辰年生まれの大原孫三郎にちなんでいる

［写真：編集室］

LIXIL eye no.13
2017年6月20日発行

発行｜株式会社LIXIL
編集発行人｜森田浩一郎
マーケティング本部
セールス&マーケティング統括部
〒100-6007
東京都千代田区霞が関3-2-5
霞が関ビルディング7階
Tel: 03-6273-3635
Fax: 03-6273-3742
制作｜株式会社フリックスタジオ
デザイン｜株式会社ラボラトリーズ
印刷｜竹田印刷株式会社

＊本記事の無断転載を禁じます
＊本文中の敬称は省略させていただきました

次号『LIXIL eye』no.14は、
2017年10月発行予定です。

『LIXIL eye』のバックナンバーは
インターネットでご覧いただけます。
http://www.biz-lixil.com/column/lixileye/

CONTENTS

特集

04 **建築のまちを旅する｜01**
倉敷

06 **テーマ1**
幻の建築家・薬師寺主計の足跡をたどる
ナビゲーター｜上田恭嗣

11 有隣荘／大原美術館本館／第一合同銀行倉敷支店（旧・中国銀行倉敷本町出張所）

17 **テーマ2**
倉敷・古民家再生プロジェクト
設計・監修｜楢村 徹

19 倉敷建築めぐり

22 **住宅クロスレビュー｜01**
環境住宅
野沢正光「相模原の住宅」×中川 純「GPLの家」

30 **戦後建築コンペを振り返る｜01**
せんだいメディアテーク（コンペ実施年：1995）
空間アーキテクト×情報アーキテクト
文｜磯 達雄

36 **新世代・事務所訪問｜01**
ノウサクジュンペイアーキテクツ
ナビゲーター｜門脇耕三

44 **構造家の新発想｜01**
半透明な構造体
佐藤 淳

50 **土木のランドスケープ｜01**
大橋ジャンクション
ナビゲーター・文｜八馬 智

54 **Design＋Technique**
中央区指定有形文化財（建造物）第一号 明治屋京橋ビル
山あげ会館

58 **TOPICS**
「現代」を映し出し、一歩先を行く「ものづくり」を展示する「LIXILギャラリー」の取組み
文｜大橋恵美・筧 天留

61 **INFORMATION**
LIXILからのご案内／展覧会＋イベント／LIXIL出版 新刊案内

64 **紙上の建築｜01**
not, not, / yet, yet,
松島潤平

特集 建築のまちを旅する 01

倉敷

日本全国、どのまちを訪れても、そこにはすぐれた建築がある。
それにまつわるエピソードを知れば、旅はさらに面白い。
建築をテーマにした旅の特集、第1回は倉敷を取り上げる。
白壁の屋敷や蔵が建ち並ぶ美観地区で、観光客を惹きつける
もうひとつのランドマークが大原美術館。西洋美術を展示する日本で初めての
私設美術館だが、その本館を設計した建築家のことはあまり知られていない。
倉敷のまちづくりに大きく貢献した実業家、大原孫三郎（おおはらまごさぶろう）の下で
建築顧問を務めた薬師寺主計（やくしじかずえ）の作品を中心に、倉敷の建築を巡ってみよう。

美観地区中央を流れる倉敷川沿いの眺め。特徴的な瓦を載せた右手の建物は、大原家の旧別邸「有隣荘」。その隣に白壁の旧・大原家住宅が並ぶ。川に架かる今橋を渡ると、目の前（写真左手）に日本初の西洋近代美術館・大原美術館が建つ。倉敷を代表するこの風景に、薬師寺が深く関わっている［写真：小松正樹］

テーマ1

幻の建築家
薬師寺主計の足跡をたどる

取材・文｜磯 達雄、長井美暁
写真｜石田 篤

ナビゲーター｜上田恭嗣（ノートルダム清心女子大学教授）

薬師寺主計
やくしじ・かずえ

1884（明治17）年、岡山県賀陽郡刑部村（現・総社市）に父・厚一、母・要の長男として生まれる。薬師寺家は江戸時代に2万5千石の備中足守藩木下家の御用商人だった。略歴はp.10参照［写真提供：上田恭嗣］

倉敷川と旧街道の本町通りを中心に、白漆喰の蔵や屋敷が建ち並ぶ倉敷。伝統的な木造建築群が約1km四方のエリアで面的な広がりをもって残されているのも希有なことで、そのまちは美観地区と呼ばれている。江戸時代から続く商家の蔵や店が軒を連ねる光景の中に、石壁の近代建築がときどき溶け込んでいるのもまた倉敷らしさ。ギリシャ神殿風のファサードが威光を放つ「大原美術館」はその代表格だ。
近代の倉敷も商人や財閥によって築かれた。なかでも大原家は紡績産業を興し、財閥としてまちづくりを推進した立役者だ。1888（明治21）年、大原孝四郎が倉敷紡績所を興し、二代目大原孫三郎はさらに倉敷絹織（現・クラレ）を創業。孫三郎はその工場、私設美術館、別邸など倉敷を代表する近代建築を次々と建設していくが、その背景には才気ある建築顧問が存在した。陸軍省の建築技師だった薬師寺主計だ。
薬師寺は陸軍省で培った最新技術を駆使して、次々と近代倉敷の建築を生んでいった。今回の旅では、薬師寺主計の研究者として多数の論文、著書もあるノートルダム清心女子大学の上田恭嗣教授とともに、代表作の「大原美術館」「有隣荘」「第一合同銀行倉敷支店」（旧・中国銀行倉敷本町出張所）を中心に薬師寺主計の足跡をたどる。

「石造のように見えますが、実は鉄骨入りの鉄筋コンクリート造なのです」

「大原美術館」の本館を目の前にして、上田教授はまず語り出した。ここは倉敷を代表する観光スポットで、この日も大勢の人で賑わっている。これを設計したのが、建築家の薬師寺主計（やくしじかずえ）だった。

「大原美術館」は倉敷絹織（現・クラレ）[01]の創業者として知られる大原孫三郎（おおはらまごさぶろう）[02]が、1930（昭和5）年に開設した日本初の西洋近代美術館で、大原とその知遇を得ていた洋画家の児島虎次郎（こじまとらじろう）[03]が、日本の若者たちに本物の西洋絵画を見せたいとの思いで実現した施設だ。建物の外壁や正面の円柱は、色の付いた土や砕石をモルタルに混ぜて塗った擬石である。円柱の柱頭がイオニア式であることからギリシャ神殿風の外観と称されることが多いが、側面や裏面にほとんど装飾がないため、上田教授は「ローマ建築様式を採り入れたと考えるべき」と話す。丘の上に建てられることの多かったギリシャ神殿は四周に凝った意匠が施されたが、市中の平地に建てられたローマ神殿は正面の意匠のみ重んじ、それもギリシャ時代に比べるとシンプルだという。ただし、正面の壁上部に開けられた円窓はローマ建築様式に見られない表現だ。上田教授はこれを「ゴシック建築などに見られるバラ窓をヒントにしたものでは」と推測する。

上田教授が薬師寺主計という建築家を研究するようになったのは、岡山市内にある「中国銀行本店」（旧・第一合同銀行本店、1927、現存せず）がきっかけで、アール・デコを大胆に採り入れたデザインに惹かれたという。古典主義から当時、最新のアール・デコまで、さまざまな様式を操れる能力を薬師寺はもっていたというわけだ。

美術館の展示室に入ると、壁の一部がくり抜かれ、そこに鉄骨が現れていた。これはコンクリートの中に隠れていた構造を、増築工事の際にオブジェとして残したものだ。「鉄骨鉄筋コンクリート造は、当時としては最高度の構造。こうした新しい技術にも薬師寺は通じていました」。

陸軍省所属の建築技師として

建築家としてさまざまな点から優れた資質をうかがわせる薬師寺主計だが、その業績を理解するには、まず、近代以降の倉敷を発展させた大原家について知っておく必要があると上田教授は話す。

倉敷は江戸時代に幕府の直轄領となって代官所が置かれ、物資輸送の集散地だった。また、新田開発によっても大きく発展し、商業的な成功者が現れた。美観地区に残る古い建物はそうした豪商の商家を原形とするものが多く、「商人のまち」として繁栄した歴史を今に伝えている。しかし、明治維新によって社会が一変した後は、とくに産業をもたなかったため徐々に産業が沈滞していく。これを打ち破るべく3人の青年が立ち上がり、大地主であり豪商でもあった大原孝四郎の多額の出資により倉敷紡績所[04]が設立され、孝四郎が初代社長を務めた。その子息である孫三郎も、やがて同社の二代目社長に就任。さらに、中国水力電気会社（現・中国電力）を設立し、第一合同銀行（現・中国銀行）の頭取にもなり、化学繊維レーヨンの事業化を目的に倉敷絹織を興す。

大原孫三郎の功績は、富を地域社会に還元し、まちづくりにも力を注いだことにある。たとえば大原奨学会[05]は、備中地方の人材育成のためにと、まだ学生だった孫三郎が父の孝四郎に進言したことから創設された。先に触れた洋画家の児島虎次郎も、東京美術学校（現・東京藝術大学）の入学にあたり、この奨学金を願い出るために大原家を訪れたことがきっかけで、孫三郎と生涯にわたる親友となっている。建築家の薬師寺も大原奨学会の支援を受けた一人だ。1884（明治17）年、現在の岡山県総社市で御用商人の家に生まれ、東京帝国大学工科大学建築学科卒業後は、陸軍省の建築技師として1910（明治43）年に入省。国はこのころ、軍の施設を近代的に整備するために優秀な建築技師を求めており、薬師寺は陸軍省に16年在籍し、その大半を経理局の所属で過ごした。同期が地方まわりを命じられるなかで、薬師寺だけは常に本省配属だったことが薬師寺がいかに重要な存在だったかを物語っている。

欧米の建築視察の命を受けたのも、それゆえだろう。しかも期間は1年半と、異例といえるほど長かった。薬師寺が渡航した1921（大正10）年前後の欧米は近代建築の黎明期で、鉄とコンクリートとガラスを用いた建築表現が生まれていた。薬師寺は当時、航空学校の施設設計に携わり、海外派遣の主たる目的も空港設備の研究にあったが、一方でそれら新しい建築の胎動を肌で感じていたに違いない。帰国の少し前には、日本ではまだまったく無名だったル・コルビュジエに偶然出会い、彼の建築論を直接聞いてすっかり魅了され、帰国後に日本の建築界に紹介している。

帰国から半年後、関東大震災が発生し、東京の主要な陸軍施設が壊滅状態になった。薬師寺は陸軍省に命じられて陸軍施設の震災復興の最高責任者という要職に就き、翌年には高等官二等勅任技師を拝命した。これは建築職として省内で初めて、天皇の勅命による技師が生まれたことを意味し、陸軍省が願い出ることができる最高の待遇だった。しかし陸軍施設の震災復興におおよその目処が立った1926（大正15）年に、薬師寺は陸軍省を依願退職してしまう。「当時、文官出身である建築技師の待遇は武官より低く、実績や実力があっても課長職以上への昇任が認められませんでした。それが改善される見込みがないと悟ったのでしょう」。陸軍省を辞めた背景を、上田教授はそのように推測する。

天皇の建築技師から
大原家の専属に

薬師寺が陸軍を去った理由はもう一つある。それは、大原孫三郎から倉敷に戻ってくるよう懇願されていたからだ。実は薬師寺は1913（大正2）年から陸軍省に在籍しながら大原家の建築顧問も務めており、事業展開に必要な建物づくりを任され、自身の設計事務所「やくも会」でこれにあたっていた。この時に設計したのが、「大原社会問題研究所書庫」（1922）、「岡山染織整理株式会社」（1922）、「第一合同銀行倉敷支店」（1922）といった建物である。また「倉紡中央病院」（現・倉敷中央病院、1923）の建設には、顧問として関わった。

「大原美術館から橋を渡ってわずかワンブロック進んだところに、第一合同銀行倉敷支店があります」。上田教授にうながされて美術館を後にすると、ルネサンス様式の建物の前に出た。第一合同銀行は現在の中国銀行の前身にあたり、初代頭取を大

01｜倉敷絹織（現・クラレ）
1926年、人造絹糸レーヨンの事業化を目的として倉敷で設立。社名は1949年から倉敷レイヨン、1970年からクラレに変わっている。合成繊維ビニロンや人工皮革クラリーノなどの開発を成功させた。樹脂製品や機能材料などの分野にも事業を広げている

02｜大原孫三郎
実業家（1880–1943）。倉敷の大地主で倉敷紡績所の初代社長を務めた大原孝四郎の三男で、倉敷紡績、倉敷絹織、第一合同銀行（現・中国銀行）、中国水力電気会社（現・中国電力）などを率いて大原財閥を築いた。また大原社会問題研究所や大原美術館を設立するなど、社会事業、文化事業にも熱心に取り組んだ

03｜児島虎次郎
洋画家（1881–1929）。岡山県出身で、学生時代から亡くなるまで大原孫三郎と親しく付き合い、大原美術館に収蔵する絵画の購入も任された。倉敷にある晩年の住まい「無為堂」も、大原家が建てたものである。明治神宮奉賛会から絵画館に納める明治天皇の絵の作成を依頼されたが、それを完成させる前に47歳の若さで死去した

04｜倉敷紡績所
1888年、倉敷で設立。1893年、社名を倉敷紡績に改称。1988年からは「クラボウ」を正式社名扱いとした。繊維事業に始まって、現在では化成品事業、環境メカトロニクス事業なども手がける

05｜大原奨学会
1899年に始まった育英事業で、犬養毅ら岡山出身の有力者が選考委員を務め、20年間で100人以上の地元子弟に奨学金を給付した

大原美術館にて薬師寺の設計思想について語る上田恭嗣教授

大原美術館。手前は今橋［写真：編集室］

06｜今橋

大原美術館の前に架かる橋は、皇太子行啓の際に大原孫三郎の出資により建造されたもの。石橋に見えるが本体は鉄筋コンクリート造。欄干にあしらわれた龍の意匠は児島虎次郎による。龍は川の神であり、辰年生まれの大原孫三郎にちなむ。欄干の添え柱の頂部に天皇家を象徴する菊紋もある

07｜喫茶エル・グレコ（旧・奨農土地株式会社本社事務所）

蔦が絡まる建物は1926年に竣工。現在の喫茶店名はもちろん、大原美術館に展示されている名作絵画「受胎告知」の作者に由来する。奨農土地株式会社は、大原家の不動産を管理するため1925年に設立された

08｜伊東忠太

建築家、建築史家（1867–1954）。日本建築史を学問として確立するとともに、建築進化論に基づいた独自の東洋風建築を設計した。作品に「一橋大学兼松講堂」「震災記念堂」「築地本願寺」ほか。「平安神宮」「明治神宮」など神社の設計も多く手がけた

09｜無為村荘

酒津にある大原家の別邸。その敷地内にある無為堂は、明治天皇の御事蹟を描く絵画の制作中、重圧から身体を壊した児島のために大原が建てた住宅で、基本設計は薬師寺が手がけたが、大原は児島の思い通りにつくらせ、パピルス柱や龍の彫り物など、エジプトや中国の意匠が採り入れられている。児島は美術館の構想でも「建物はエジプトや中国などの古建築を例に」と語っていたという。写真は無為堂の暖炉コーナー。現在、敷地内は非公開となっている［写真提供：上田恭嗣］

原孫三郎が務めていたが、薬師寺が孫三郎から最初に設計を依頼されたのが、その倉敷支店だった。建物は「中国銀行倉敷本町出張所」として2016年3月まで使われていたが、現在は営業を終了している。同行の寄贈により、現在は大原美術館が所有しており、展示室としての活用が検討されている。

ドリス式オーダーの列柱やアール・ヌーヴォー的なステンドグラスなどについ目がいくが、基本的にうかがえるのは経済性を重視した設計態度だという。外壁を指差しながら、上田教授は指摘する。「基壇部は御影石を用いていますが、その上の壁はモルタルに細かな砕石を混ぜて、はつったり叩いたりする手法で表面を加工したものです。それで石を積み上げたように表現したのです。その後の大原家の事業展開のことを考え、無駄な出費を抑えようと心がけていたのでしょう」。大原美術館本館に見られた擬石の壁は、この時点ですでに採られた手法だったのだ。

天皇の迎賓施設となる住宅——有隣荘

「大原美術館」の近くには、薬師寺が設計に携わったものが密に存在している。先ほど渡った美術館の前に架かる「今橋」[06]や、また、美術館に隣接する「喫茶エル・グレコ」[07]の建物も、もとは薬師寺が「奨農土地株式会社本社事務所」として設計したものだ。そして、その中心に「有隣荘」がある。この建物は大原が病弱な妻のために、本宅の道を挟んだ隣に別邸を建てようと考えたのが始まりだ。本宅は江戸時代寛政年間に建てられた開放的なつくりの町家で、家族で落ち着いて暮らせなかったからだ。

別邸の計画は、1926（大正15）年、当時皇太子だった昭和天皇が倉敷を訪れて、大原家の関連施設を視察したことをきっかけに用途や規模が変わる。当時の倉敷には皇室をはじめとする貴賓を迎え入れられる施設がなく、しっかりした迎賓施設をつくる必要がある——大原孫三郎はそう考えたのである。ちなみに先に触れた「今橋」も、行啓の際、皇室が通るには以前の石橋ではあまりに貧相と考えた大原が、私財を投じて架け替え工事を行い、倉敷町（当時）に寄贈したものだ。別邸は「有隣荘」と命名され1928（昭和3）年に完成。大原夫妻は入居したのだが、その年のうちに夫人が病気で入院し、2年後には亡くなってしまう。そのためか、孫三郎もこの家では生活しなくなったという。迎賓施設として使われたのは1947（昭和22）年、昭和天皇が倉敷を訪れ宿泊された際だが、そのとき、孫三郎はすでに他界していた。

普段は非公開の「有隣荘」だが、今回は特別に許可を得て中まで入ることができた。ここからは「有隣荘」の建築について見ていこう。外観を特徴づけている屋根は、緑色と黄色の入り交じった瓦で葺かれているため、「緑御殿」とも呼ばれるそうだ。この瓦は、中国文化を高く評価していた児島虎次郎の進言で孔子廟などを模してつくらせたものだ。しかも屋根の形は中国の宮城風で、伝統的な木造家屋が建ち並ぶ美観地区にあっては特異に見える。

さらに屋根の下の建物本体は左右でデザインが違い、正面向かって左側は平屋の洋風住宅、右側は2階建ての和風住宅と、なんとも奇妙な構成だ。薬師寺は当時流行していたバンガロー風の住宅を計画していたが、用途や規模の見直し後、貴賓を迎え入れる建物なら日本建築にすべきとの提言が孫三郎に受け入れられたためだ。

しかし、薬師寺は困った。日本建築には明るくないのだ。そこで大学の恩師で、当時、日本建築の第一人者だった伊東忠太[08]に和風住宅部分の基本設計を頼むことにした。伊東は「法隆寺建築論」（1893）を著した日本で最初の建築史家であり、京都の平安神宮（1895）や東京の築地本願寺（1934）などを設計した建築家でもある。陸軍省所管だった靖国神社の復興工事を通して、薬師寺とは業務上の深いつながりもあった。

一方、洋風住宅の部分は薬師寺による設計で、彼の好んだアール・デコのデザインがインテリアや家具類に見られる。ところが上田教授が「ここもご覧ください」と指差した食堂の造作には中国風のデザインが採り入れられていた。児島の進言により、薬師寺による設計が工事中に覆った結果だという。建築家が設計した内容を着工後に大きく変えることは、よほどの手落ちがない限りあり得ない。それは今も昔も同じで、ましてや薬師寺は陸軍省ナンバーワンだった建築技師であり、その自負もあったはずだ。しかし設計変更を受け入れた。その事情を上田教授は、「大原と児島が固い信頼関係で結ばれていたこと、児島の提案を大原も受け入れたことのほか、天皇を描く画家としての児島に薬師寺が一目置いていたこともあるでしょう」と語る。児島は聖徳記念絵画館に納める明治天皇の御事蹟を描いた絵画を依頼されていたのだ。

大原の偉業を天下に示す機会の到来

「有隣荘」は貴賓を迎えるにふさわしい建物として一級品の材料を用い、意匠を凝らしたため、建設

有隣荘［写真：編集室］

費はとんでもない金額になった。現在の金額に換算すると約10億円、のちに建設する「大原美術館」の約5倍だ。ただし薬師寺自身はコスト管理に長けた建築家で、「有隣荘」以外は経済的な設計を行っている。「大原美術館」の外装もその一例で、不況とはいえ、大原家の財力をもってすれば天然石を張付けることはできたが、そうしなかったのだ。また、展示室で当初はトップライトからの自然採光を行っていたのも、今でいう省エネを考慮したもので、当時は電力が高価だったうえ、戦争の足音が近づくなか、文化施設での電気使用は規制されるとの読みもあっただろう。

美術館は、もともと児島の構想では市の中心部から少し離れた酒津にある大原家別邸の無為村荘[09]というところに建てる計画で、大原の賛同も得ていた。現在地を選んだのは児島の死後、大原に建設を任された薬師寺である。薬師寺は1930（昭和5）年2月、国家事業として陸軍特別大演習が岡山で同年11月に実施されるとの情報を入手した。計3万人の兵士が参加する模擬戦闘演習で、昭和天皇をはじめ皇室、内閣総理大臣、陸軍参謀総長などがこぞって岡山に駐留し、倉敷も訪問するという。まさにそんな状況を見越して建てたのが「有隣荘」だった。薬師寺は大原孫三郎という類い稀なる実業家を国家に誇れる絶好の機会ととらえ、美術館を現在の地に建てることを進言した。この地に美術館を建てれば、薬師寺が倉敷で行ってきた建築活動の成果を古巣の陸軍省の上層部や同僚、部下に示すこともできるのだ。

「有隣荘」の2階から眺める「大原美術館」は雄壮な構えだ。この大演習で「有隣荘」に皇室が泊まることはなかったが、休み処として大原家本宅とともに使われ、大原の偉業を広く国家に伝えたいという薬師寺の思いは叶った。

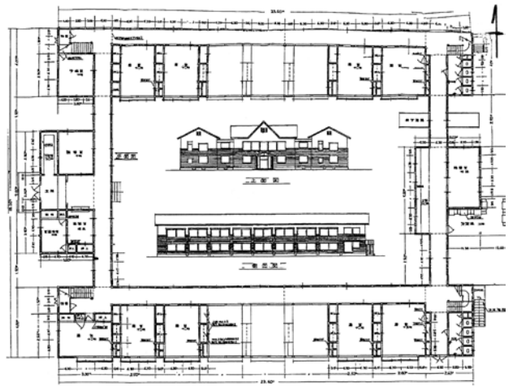
近代工業都市を思い描いた倉敷のまちづくり

一方、大原孫三郎は薬師寺をどう評価していたのだろうか。上田教授は「有能な建築家として認めていたばかりでなく、陸軍省経理局での統括手腕も評価して、絶大な信頼を寄せていました」と語る。

大原孫三郎は1926（大正15）年に倉敷絹織を創立し、陸軍省を退職した薬師寺を取締役に迎える。そして翌年から酒津の敷地約12万坪に、倉敷絹織の本社工場の建設工事が始まり、1931（昭和6）年

10｜倉紡中央病院（現・倉敷中央病院）

大原孫三郎が従業員のために「東洋一の理想的な病院」を目指して設立した病院。1927年に名称を変えて一般開放された。倉紡中央病院時代からある赤瓦の建物が3棟、現存している［写真：小松正樹］



倉敷絹織本社工場の食堂棟内部（上）と同敷地内に建てられた女子寄宿舎の平面図・立面図（右、1977年複製）［写真および図面提供：上田恭嗣］

倉敷絹織本社工場／女子寄宿舎

倉敷絹織の本社工場には、従業員のためのさまざまな福利厚生施設が併設され、薬師寺はそれらも設計した。女子寄宿舎は中庭を設ける「ロの字」型の配置計画で、木造2階建てに切妻屋根を載せている。建物内は、西側1階の玄関棟に事務室や世話係室、読書室、向かいの東側の棟（この棟は平屋）に結髪室と洗濯場があり、北側と南側の長辺部分は寄宿室で、1階は全15室。女工の寄宿スペースなら当時は1人1畳でもまだ良い方だが、ここでは2畳と十分な収納を設けた。また、南面いっぱいに採光・換気用の窓を設け、座式の生活に合わせた出窓形式としている。水洗トイレの導入とともに、女工が快適に生活できるようにとの薬師寺の考えが随所に見られる。「『女工哀史』（改造社、1925）とほぼ同じ時代に設計されている。いかに画期的な建築計画だったか」（上田教授）

の終わりごろまでにほぼ完成することとなる。設計監理はもちろん薬師寺だ。工場は2006年まで使われていた。上田教授は調査のため、取り壊しの直前の建物に入っており、「事務棟は木造でしたが、工場棟は鉄筋コンクリート造で、実にしっかりとしたつくりでした。当時の工場建築でここまでやるのかとびっくりしました」と振り返る。

そのなかでも、最も驚かされたのは女子寄宿舎だという。部屋には押入、服掛け、文机が1人に1つずつ用意され、南面は開口部を設けて採光を確保し、共同の図書室や裁縫室、娯楽室まで完備していた。トイレはすでに水洗である。「男工すら使い捨ての時代に、薬師寺は女工を大切に扱った。九州や四国から採用したたくさんの女子を、ただ働かせるのではなく、教養を身に付けさせて、ずっと倉敷に住んでもらおうとしていた。そうして人口が増えることが、倉敷の発展にもつながると考えていたのです。その考えに出資した大原ともども、先見性は他に類を見ません」と上田教授。まちづくりはまず人づくりから。そんな2人の思いがうかがえる。

それは薬師寺が建築顧問として関与した「倉紡中央病院」[10]にも表れている。この病院は大原が倉敷紡績の二代目社長を務めていたときに、従業員の健康管理や診療を行うために開設したもので、最先端の医療設備を整えるばかりでなく、四季を通じて花を楽しめる温室や、患者のためのエレベーターも備えていた。数年後には一般開放され、現在も地域の基幹病院として機能している。

なおこの病院の屋根には、設立当時から赤瓦が使われている。倉敷絹織の工場群も屋根は赤いスレートで葺かれており、実は大原美術館本館も当初は勾配屋根に赤瓦を載せる計画だった。

薬師寺が赤瓦を取り入れようとしたのは、倉敷の風景にヨーロッパの風景を重ねようとしていたのではないか、というのが上田教授の推測だ。薬師寺は大原の命を受けてレーヨン業を調査する際、フランスのリヨンを訪れている。リヨンの旧市街は赤瓦の美しいまち並みが特徴だ。上田教授はさらにこう続ける。「リヨンでは建築家のトニー・ガルニエ[11]が、近代工業都市を提唱して、その都市イメージを描いていた。薬師寺も倉敷を近代工業都市にしようと思い描いており、生まれ変わる化学繊維のまち・倉敷を、リヨンにならって表現しようとしたのかもしれません」。

まちづくりを次代に託し大原のもとを去る

薬師寺は1936（昭和11）年、51歳のときに大原のもとを去り、陸軍省の嘱託技師として古巣に戻った。晩年、倉敷絹織時代について「男ざかりを仕事に捧げた第二の青春だった」と振り返り、「この時代に大原氏の俊敏な社会観と進歩的思想に私淑した。今も最も尊敬している一人」と書き残している。

現在に至る倉敷のまちづくりは、戦前、大原孫三郎と薬師寺の二人三脚によって築かれ、戦後は孫三郎の長男、大原總一郎（おおはらそういちろう）[12]と建築家の浦辺鎮太郎（うらべしずたろう）[13]が受け継いだ。浦辺は倉敷絹織の採用面接で薬師寺に見いだされて入社し、薬師寺が退職する際には、「君にもうバトンを渡す。君は大原家に仕えているから、晩年は幸福だぞ」と言われたという。そんなエピソードを上田教授は明かしてくれた。建築界において浦辺の名前はよく知られるところだが、薬師寺については、陸軍省時代に手がけた建物の図面が残っていないことなどから、評価されぬまま歴史のなかに埋もれてしまっている。しかし、今こうして多くの観光客が訪れる倉敷のまちを歩くと、その足跡は確かに残っている。それを実感した倉敷の旅だった。

11｜トニー・ガルニエ
フランスの建築家、都市計画家（1869–1948）。リヨンを想定して構想した「工業都市」（1917）は、近代的な都市計画の先駆けとしてル・コルビュジエからも高い評価を得た

12｜大原總一郎
実業家（1909–1968）。大原孫三郎の長男で、孫三郎の跡を継いで倉敷絹織、倉敷紡績などの社長を務めるとともに、企業の社会活動、文化活動を継続的に発展させた。倉敷をドイツの城郭都市にたとえた「隅櫓構想」のまちづくりビジョンを打ち立てたことでも知られる

13｜浦辺鎮太郎
建築家（1909–1991）。京都帝国大学卒業後、倉敷絹織に入社し、大原總一郎のもとで建築設計活動を行う。1962年には倉敷建築研究所（のちの浦辺設計）を設立し、大原財閥関連以外にも幅広く設計活動を行うようになった

上田恭嗣　うえだ・やすつぐ
1951年三重県生まれ。京都工芸繊維大学大学院を修了後、ノートルダム清心女子大学に着任し、現在、同大学人間生活学部教授。専門は近代建築史、住居学。著書に『大原美術館の誕生』『天皇に選ばれた建築家 薬師寺主計』などがある。日本建築学会岡山支所長、岡山近代建築研究会代表なども務める。

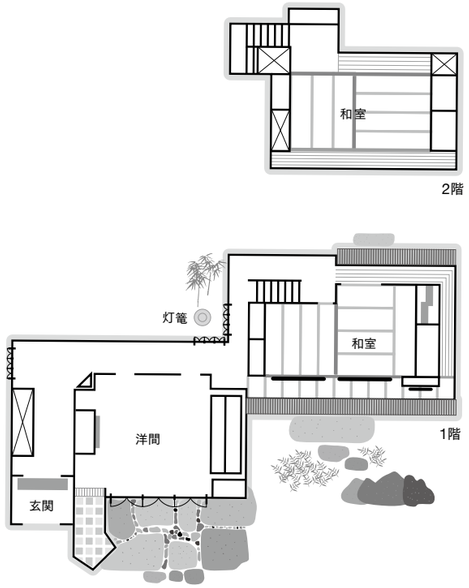
磯 達雄　いそ・たつお
▶p.32参照

長井美暁　ながい・みあき
編集者、ライター／山形県出身。日本女子大学卒業後、『室内』編集部に所属。2006年よりフリーランス。

取材協力：公益財団法人大原美術館

薬師寺主計 略歴

1884（明治17）年
岡山県賀陽郡刑部村（現・総社市）に4人姉弟の長男として生まれる
1906（明治39）年
第六高等学校を卒業後、東京帝国大学工科大学建築学科に進む
1909（明治42）年
同大学を卒業、私立中央工学校建築科の初代講師に就任
1910（明治43）年
陸軍省に入省し、経理局建築課に配属。陸軍戸山学校、陸軍歩兵学校、陸軍騎兵学校、所沢航空隊、陸軍科学研究所、陸軍衛生病院建設に設計監督として携わる。歩兵第三聯隊兵舎（のちの東京大学生産技術研究所）では最高責任者として関与
1913（大正2）年
陸軍省に在籍しながら、大原孫三郎の建築顧問としての活動を始める。大原社会問題研究所書庫、岡山染織整理株式会社工場、第一合同銀行倉敷支店などを設計する。倉紡中央病院（現・倉敷中央病院）にも建築顧問として関与
1916（大正5）年
兵役期間につき出兵
1921（大正10）年
1年半の欧米建築視察。その途中でル・コルビュジエに日本人建築家として初めて会う
1926（大正15）年
陸軍省を依願退職。大原孫三郎に迎えられ、倉敷絹織の取締役に就任
1927（昭和2）年
倉敷絹織の工場（第1期新築工事）が着工
1928（昭和3）年
有隣荘が竣工
1929（昭和4）年
倉敷絹織1期工事が終了し、本格操業に入る。薬師寺は常務取締役兼工場長に任命され、内部組織として建築設計部門を設置する（戦後、この部門が倉敷建築研究所として独立する）
1930（昭和5）年
大原美術館本館が竣工
1931（昭和6）年
倉敷絹織の2期工事が完了
1934（昭和9）年
京都帝国大学を卒業した浦辺鎮太郎が倉敷絹織に入社し、薬師寺の部下となる
1935（昭和10）年
財団法人大原美術館の理事に就任
1936（昭和11）年
設計を手がけた倉敷絹織西条工場の完成を見届けて倉敷絹織を依願退職。東京に戻って陸軍大臣・宇垣一成の私設秘書に。陸軍省に嘱託技師としても迎えられる
1942（昭和17）年
衆議院議員選挙（翼賛選挙）に岡山第2区から立候補、落選
1945（昭和20）年
終戦。戦後は寿工業、日本セルローズ工業、東京立体駐車場、藤木工務店、足利繊維といった企業の社長や顧問を歴任
1965（昭和40）年
熱海の自宅で逝去。享年80



有隣荘平面模式図［提供：公益財団法人大原美術館］

MAP 1
11

有隣荘

1928年

設計｜薬師寺主計　設計指導｜伊東忠太（和風部分）　内装デザイン｜薬師寺主計、児島虎次郎

和風と洋風が対をなす倉敷随一の迎賓館

「有隣荘」は、大原孫三郎が家族だけで生活できる別邸を望んで計画されたものだったが、皇室をはじめとする貴賓客を迎え入れる機能もほしいと希望が出され、計画が大きく変更されてでき上がっている。敷地は倉敷川を挟んだ大原美術館の向かい側で、旧・大原家住宅とは道を挟んで隣接している。塀越しにも、その独特な瓦屋根が見える。緑色と黄色が入り交じった釉薬瓦の色は、画家の児島虎次郎の提言に基づくものだろうと、上田教授は推測する。形は当時、富裕層に流行していたスパニッシュ瓦と同じ形状。ただし製造されたのは大阪・泉州の工場だという。建物は平屋の洋風住宅と2階建ての和風住宅を組み合わせた構成で、洋風部分を薬師寺、和風部分は伊東忠太の基本設計に基づき薬師寺が設計した。木材は台湾の檜、和室の天井板は屋久杉の上物、床板は欅の玉目一枚板、塀の腰板は南洋産のチーク、基礎石には岡山城や高松城の石を取り寄せるなど、各地から上質の材料を集めて建てられている。現在の所有者は大原美術館。通常は公開されていないが、春と秋に特別公開期間がある。

洋風住宅部にある洋間は娯楽室として使われた。内装デザインは薬師寺が好んだアール・デコ様式

1

2

3

4

5

6

7

1 玄関。当初の設計では外開きの観音扉だったが、変更されて両引き戸になった。「洋風なのに引き戸は奇妙ですね」（上田教授）［写真：編集室］
2 洋間に設けられた御影石の暖炉には、児島虎次郎による石版画が取り付けられている
3 左が洋風住宅で右が和風住宅。和風住宅部の屋根の四隅には、伊東忠太のデザインと思われる鬼獣の焼き物が魔除けとして設置されている。洋風部の赤い壁は、兵庫県の竜山石を加工したモルタル塗り。庭は白楊の名前で知られる八代目・小川治兵衛が手がけたが、のちに大きく手が加わえられている。改修には、孫三郎自らアイデアを出したと伝えられている［写真：小松正樹］
4 倉敷川対岸から有隣荘を見る
5 有隣荘（左）と旧・大原家住宅（右）の間の路地から大原美術館を見る
6 和風住宅部2階の廊下からは、倉敷川や美観地区の伝統的なまち並みがのぞめる。2階の和室は客間として使われていた
7 北側の庭には建物の2面が外塀に接した茶室がある。建設当時はなかったが、「世の常の茶人とはおおよそその趣を異にする」といわれた茶人・大原孫三郎がのちにつくらせた

MAP 1
14

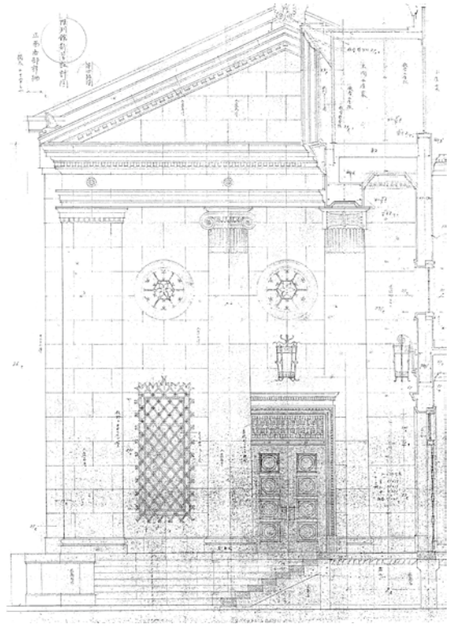
大原美術館本館

1930年

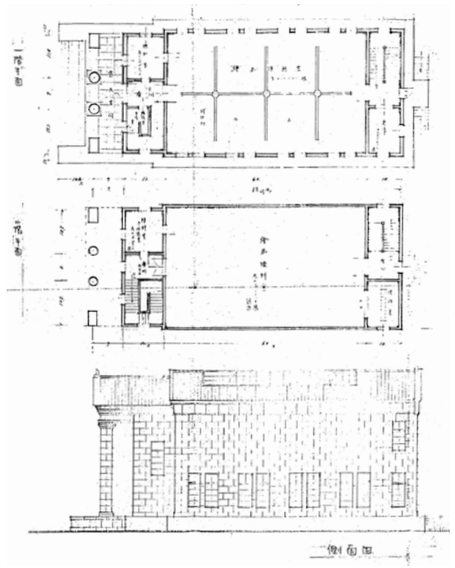
設計｜薬師寺主計

クラシック様式が際立つ
日本初の西洋近代美術館

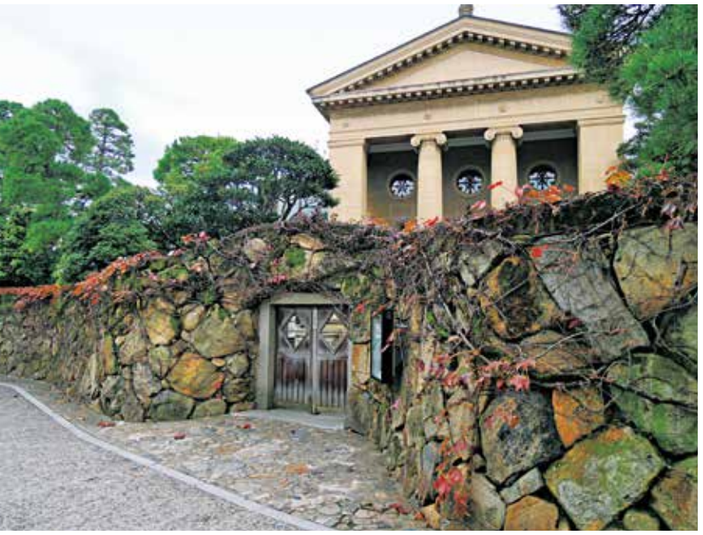
「大原美術館」は実業家の大原孫三郎が設立した日本初の西洋近代美術館。洋画家の児島虎次郎が、孫三郎の依頼を受けてヨーロッパを巡り収集した、エル・グレコ、モネ、ゴーギャン、マティスといった作家の名品を展示している。大原家別邸と庭園のある「新渓園」の一部を活用して建てられたもので、その後、敷地内には日本の近現代美術を展示する分館、工芸館、東洋館などが建てられた。本館は基壇、中間部、頂部からなる明快な3層構成をとった古典主義の外観で、イオニア式オーダーの円柱が三角形の破風を支える。切妻屋根なのは正面玄関部分のみで、その奥の展示室部分は陸屋根である。構造は、設計では鉄筋コンクリート造だったが、工事段階で鉄骨鉄筋コンクリート造に変えている。施工は藤木工務店が行った。内部は2層の展示室で、当初、2階にはトップライトが設けられており、その設計には建築環境学者の渡辺要がかかわった。現在は人工照明に変えられている。



正面立面図（原図）［提供：上田恭嗣］



建設当初の平面図・側面図［提供：上田恭嗣］



1

2

3

1 石塀は美術館の建設前にあったものに薬師寺が手を加え、龍のようにうねった形にした［写真提供：上田恭嗣］
2 正面の壁上部に開けられた円窓。この窓から倉敷川を挟み、大原家の旧本宅と旧別邸「有隣荘」を眺めることができる
3 2階の展示室。当初はトップライトから自然採光していたが、現在は人工照明に改められている［写真：編集室］
4 正面玄関部分は切妻屋根だが、その奥の展示室部分は陸屋根となっている。左手に見えるガラスのアトリウムは、1991年の増築により生まれた新展示棟に来館者を導く空間で、設計は浦辺設計が手がけた

4

MAP 1
09

第一合同銀行倉敷支店

旧・中国銀行倉敷本町出張所

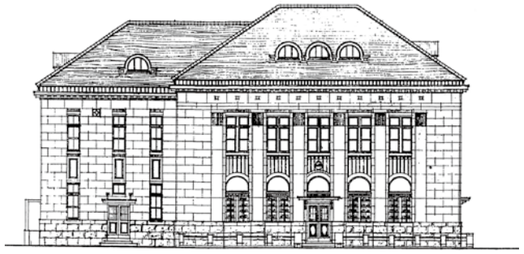
1922年

設計｜薬師寺主計

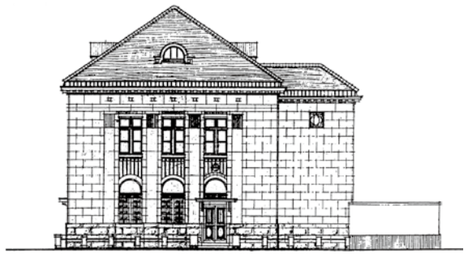
近代建築黎明期の最先端デザイン

第一合同銀行は大原孫三郎が初代頭取を務めた銀行で、現在の中国銀行にあたる。第一合同銀行倉敷支店は薬師寺が大原からの依頼で初めて設計した建物で、ルネサンス様式のデザインが特徴。薬師寺は岡山市にある本店も設計している（1927、現存せず）。国の登録有形文化財。

1



北立面図（原図）［提供：上田恭嗣］



西立面図（原図）［提供：上田恭嗣］

2

3

4

1 ドリス式のオーダーを簡略化した柱を正面に6本、側面にも4本配している。主要部分は煉瓦造で一部鉄筋コンクリート造、屋根は木造
2 1階の営業室。銀行の営業はすでに停止しており現在は中に入れない。将来は展示室としての公開も検討されている
3 幾何学模様を基調とした壁面の装飾。壁と天井は漆喰仕上げ
4 窓上部の半円窓は丸や楕円をあしらったアール・ヌーヴォー的なステンドグラスを嵌め込んでいる［写真：編集室］

取材・文｜長井美暁

テーマ2

倉敷・古民家再生プロジェクト

設計・監修｜**楢村 徹**（建築家）

古民家が収益を上げられる枠組みづくりまで

江戸時代から残る古い町家が建ち並ぶ風景は倉敷美観地区を代表するもので、ここにも一人の建築家の存在がある。これらの町家の再生活用に尽力する楢村徹氏だ。1980年代半ばから古民家の改修設計を手がけ、再生させた数は美観地区だけで40軒近くにのぼる。

楢村氏は美観地区の近くで生まれ育ち、独立後の拠点もここに置き、地元に根ざしながら古民家再生に取り組んできた。学生時代から“建築の社会性”に関心があったという。その志向が「地域の建築文化と風土を考えること」「保存ではなく、再生活用による継承」の提唱へと結びつく。そして、実際の仕事を通して「古民家を素材として扱う」設計手法を見いだし、経験と実績を積み重ねていくうちに、古民家のハード面だけではなく、そこに暮らす人々のさまざまな事情というソフト面にも、気づけば精通していた。

2010年に楢村氏が倉敷市の中心市街地活性化事業でタウンマネージャーに抜擢されたのは、それが理由だった。楢村氏は「林源十郎商店」や「奈良萬の小路」の整備事業を通して、官民連携による古民家の再生モデルの提示を推進。これは歴史的な町家の所有者がその維持管理費を捻出できるように、収益を得られる店舗としての建物の再生活用を促すもので、建築面に関わるだけではなく、意欲ある若者がそこで起業しやすい枠組みづくりも整えた。

いずれも路地を活かす再生計画により人の回遊性を高めていて、これらのオープン後はまちのにぎわいが増し、また、町家の扱いに困っていた住人に、代々受け継いできた財産を活かす道を見せることもできた。点から線、線から面へと少しずつ広げながら「ボトムアップのまちづくり」を進めてきた楢村氏だから実現できたことだろう。楢村氏は「建築の仕事は、つくって具体的に見せられるのが長所」と話す。

このように、倉敷のまちは大原家と薬師寺・浦辺による近代都市を目指したまちづくりの他にも、楢村氏による古民家再生のようないくつものまちづくりの物語が重なり合い、今に続いている。

ならむら・とおる
建築家／1947年、岡山県倉敷市生まれ。1972年、広島工業大学工学部建築学科を卒業後、岡山市の松本組（現・まつもとコーポレーション）に入社。1981年、倉敷建築工房楢村徹設計室を設立。1988年、地元の建築家5名とともに古民家再生工房を設立。1999年、古民家再生の活動実績により日本建築学会賞（業績）を受賞。
［写真：石田 篤］

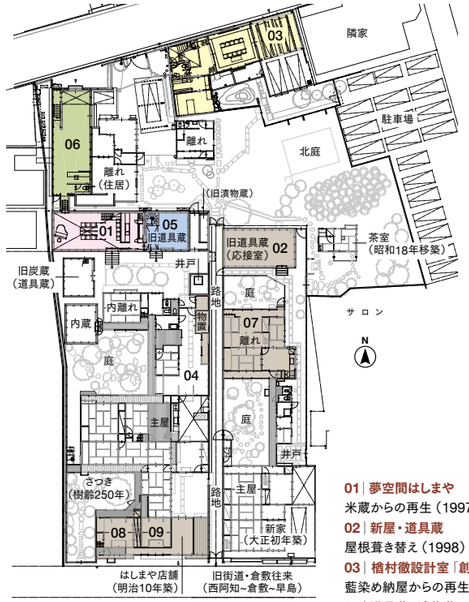
旧街道（一部、現・本町通り）を中心とした古民家再生プロジェクト

MAP 1
33

倉敷建築工房
楢村徹設計室「創想舎」

2000年

楢村氏の設計事務所は、倉敷美観地区に古くから住宅を構える楠戸家の敷地の一角にあり、江戸期に建てられた藍染めの作業納屋を再生し、事務所として活用している。納屋は崩壊寸前で、2階は土の床で人が使える状態ではなかったが、再生にあたり補強し、現在は2階に事務所を置く。1階はオープンサロンとして会合などに使えるようにしている。2.5間×6間が2棟、少し角度を振って建つ中に、楢村氏はモロッコ・カスバの土の塔とヴェネチアのイタリアンスタッコの壁を挿入。「日本のバナキュラーである民家の中に、世界のバナキュラーなものを採り入れ、その二重構造と対比により新しい感覚のデザインを生もうと考えた」というその空間は、懐古的ではなくモダンだ。楢村氏は「民家の再生だからといって和風にする必要はなく、若い世代が見ても魅力的な空間に甦らせることが大切だ。それができれば、結果として保存につながるし、新しい設計方法を生むことにもなる」と話す。



1

2

配置図兼1階平面図 S=1:120
楠戸家住宅はしまやに代表される楠戸家の敷地。
建物は分家、転用が進む

01｜夢空間はしまや
米蔵からの再生（1997）
02｜新屋・道具蔵
屋根葺き替え（1998）
03｜楢村徹設計室「創想舎」
藍染め納屋からの再生（1999）
04｜道具蔵・漬物蔵
物置棟屋根葺き替え（2001）
05｜夢空間はしまや　小ギャラリー
道具蔵からの再生（2005）
06｜ギャラリーはしまや
1階：ハルミファインクラフト
2階：ギャラリーはしまや
道具蔵からの再生（2007）
07｜新屋・離れ
屋根葺き替え（2007）
08｜はしまや店舗
屋根葺き替え（2008）
09｜店舗を他用途へ再生予定

MAP 1
07

林源十郎商店

2012年

林源十郎は大原孫三郎が影響を受けた石井十次とともに、明治期に地域貢献や社会貢献に熱心に取り組んだ薬種商で、その名を冠した本町通り沿いの店は「林薬局」として地元の人々に親しまれてきた。楢村氏はタウンマネージャーを務めているときに、現オーナーから建物をまちづくりに活かしてほしいとの提案を受け、デザインとものづくりの情報発信拠点「倉敷生活デザインマーケット」として再生し、衣食住に関わる8店舗が集まる。楢村氏は通りに面した木造3階建ての本館（1934）だけではなく、離れや蔵、路地を活用して人々を敷地奥まで誘い込むように計画し、さらに、通りを挟んで裏向かいに建つ「倉敷物語館」（旧・東大橋家住宅）とも連続させることで、まちでの回遊を促している。景観を守るために本館の外観は改修前後でほとんど変えていないが、この施設ができたことで人の流れは明らかに変わった。

配置図兼1階平面図 S=1:600

1

2

3

1　a棟（本館）3階の屋上展望テラスから、d棟（旧・蔵）とc棟（旧・離れ）を見る
2　外観はほぼ以前のまま。大きく開放した門（右）が、敷地奥へと人を誘う
3　a棟（本館）1階の倉敷意匠計画室の店舗。床と天井は既存を利用
［写真：小松正樹］

倉敷建築めぐり
KURASHIKI

意外にも、倉敷はかつて瀬戸内海に浮かぶ小さな島だった。倉敷のまちのほとんどは海の底。戦国時代から江戸時代を通じて干拓が続けられ、土木事業によってつくられた土地だ。干拓前から年貢の集散地で、蔵屋敷の並ぶ「倉敷地」と呼ばれたのが地名の由来。江戸時代には幕府直轄地となり代官所が置かれ、物流の集散地として栄えて今も商家の蔵が並ぶ。

日本の近代を牽引した紡績産業が生まれたのがこのまちだ。この地で紡績のトップメーカーを創業した大原家と建築家・薬師寺主計によって生み出された建築が、倉敷に近代の景観を加えていった。それらすべてが空襲に遭わずに見事に残り、景観保全の条例も全国に先駆けて制定されている。近年では古民家の再生プロジェクトも盛んだ。それらの重要建築をはじめ、ぜひ見ておきたい倉敷の歴史建築、現代建築の数々を紹介する。

写真｜小松正樹

倉敷美観地区とは、「倉敷市美観地区景観条例」（2000年）に基づいて指定された、町並み保存地区。1967年の「倉敷川畔特別美観地区」、1979年「重要伝統的建造物群保存地区」を基に指定されたもの。江戸幕府の天領時代、倉敷代官所が置かれ、倉敷川と鶴形山南側の街道（現・本町通り）を中心に物資の集散地として栄え、一帯に白壁なまこ壁の屋敷や蔵が並んだ。空襲に遭わず戦災を逃れたため、そのまち並みは残り、国内最初の町並み保存地区に指定された

伝統と共存する倉敷建築

継承される大原總一郎と浦辺鎮太郎の思想

大原孫三郎と薬師寺の後、倉敷の建築を充実させていったのが、孫三郎の息子で倉敷紡績、倉敷絹織(現・クラレ)の社長を継いだ大原總一郎と、その同窓生だった建築家、浦辺鎮太郎だった。浦辺は、のちに倉敷市へ編入された粒江村の生まれで、京都帝国大学で建築を学ぶと1934(昭和9)年、倉敷絹織に入社し、営繕技師として働き始める。**倉敷考古館新館**㉔や**大原美術館分館**⑱はこの時期の作品だ。

1962(昭和37)年には独立組織として、倉敷建築研究所を開設した。1966(昭和41)年には浦辺建築事務所と社名を変更して、倉敷絹織関連以外にも倉敷での仕事を広げていった。その設計手法は、倉敷のまち並みを強く意識したものだが、伝統にならうばかりではなく、古いまち並みとモダニズムの融和が試みられている。**倉敷国際ホテル**⑰に見られる、壁面の貼り瓦やコンクリート打放しの庇に、その特徴がよく表れている。倉敷紡績の工場をホテルに転用した**倉敷アイビースクエア**㉛も、日本におけるコンバージョン建築の先駆けとして高く評価されるものだ。

社名を浦辺設計へとさらに変更し、浦辺自身は1991年に死去するが、事務所は現在も倉敷のまちに深く関わり続けている。「元をたどれば大原總一郎さんの構想がある」と語るのは、浦辺設計の三代目代表である西村清是氏。その構想とは、總一郎がドイツの城郭都市を訪れた際、その美しさにうたれて発想したアイデアで、倉敷中心部の1km四方を、過去と共存しながら未来へと発展していくエリアに定め、その四隅に重要な建築物を配置するというもの。北東の**倉敷中央病院**㊵、南東の**倉敷市民会館**㉜、南西の**倉敷市立美術館**(**旧・倉敷市庁舎**㊹)、北西の**倉敷駅前再開発事業**㊳がこれにあたり、増改築を含めれば、そのすべてに浦辺の事務所はかかわった。「倉敷における浦辺の作品は、同時に大原建築でもあった。その設計思想を、これからも継承していくつもり」と西村氏は話す。

戦前の近代建築では、西村伊作の作品が貴重だ。西村は日本で近代住宅を設計した先駆者であると同時に、東京に文化学院を設立して、建築やデザインを教えた教育者でもあった。倉敷では、**若竹の園保育園舎**⑲と**日本基督教団倉敷教会教会堂**㊴などを設計しており、いずれも、大原孫三郎が設立にかかわった施設である。

伝統建築では、重要文化財に指定されている住宅が4軒存在する。そのうち**旧・大原家住宅**⑩は非公開だが、**大橋家住宅**㉑は公開されている。江戸期後期の大地主が建てた屋敷で、往時の繁栄ぶりが伝わってくる。

参考

- 社団法人岡山県建築士会(編)『岡山建築散策マップ』吉備人出版、2002
- 「教育委員会 文化財保護課 指定等の文化財」(http://www.city.kurashiki.okayama.jp/5364.htm) 2017.4.6アクセス
- 「建設局 倉敷市都市建築優秀賞受賞作品一覧」(http://www.city.kurashiki.okayama.jp/5560.htm) 2017.4.6アクセス
- 「建築文化賞・都市建築優秀賞」(http://www.city.kurashiki.okayama.jp/5538.htm) 2017.4.6アクセス
- 岡山県教育庁文化財課『岡山県の近代化遺産』岡山県教育委員会、2005
- 上田恭嗣(監修)・公益財団法人大原美術館(編)『倉敷を見つめる、日本近代の遺産:有隣荘』公益財団法人大原美術館、2012
- 上田恭嗣「建築家薬師寺主計の経歴と建築活動について」日本建築学会計画系論文集、第509号、1998.7

協力

上田恭嗣、倉敷建築工房檜村徹設計室、浦辺設計

01

大橋家住宅

設計|不詳　竣工|1796年
倉敷市阿知3
江戸後期に塩田・新田開発をした大地主大橋家の本家。国指定重要文化財に指定されている倉敷を代表する町家のひとつで一般公開されている

02

倉敷市立自然史博物館
(**旧・倉敷市水道局庁舎**)

設計|浦辺建築事務所
竣工|1971年　改修設計|1983年
倉敷市中央2
水道局庁舎として建てられた建物を、改修して博物館に転用。隣接する図書館、市立美術館とともに、文化ゾーンを形成している

03

倉敷市立中央図書館

設計|浦辺建築事務所
竣工|1983年
倉敷市中央2
隣接する自然史博物館と同じく、白い外壁と赤い屋根が特徴

04

倉敷市立美術館
(**旧・倉敷市庁舎**)

設計|丹下健三
再生時設計|浦辺建築事務所
竣工|1960年　再生|1983年
倉敷市中央2
伝統論争が論じられている時代に、丹下健三が縄文的な方向へ舵を切ったとされる作品。市庁舎として建てられたが、浦辺の設計により改修され、美術館へと転用されている

05 06

奈良萬の小路(**奈良萬・白井邸**)

設計|倉敷建築工房 檜村徹設計室
竣工|2012–2013年
倉敷市阿知2
空き家になっていた町家と老舗の旅館を改修、飲食店が入る建物として再生した。写真は、奈良萬の外観

07 ▶p.18参照

林源十郎商店

設計|倉敷建築工房 檜村徹設計室
竣工|2012年
倉敷市阿知2

08

倉敷公民館
(**旧・倉敷文化センター**)

設計|浦辺建築事務所
竣工|1969年
倉敷市本町2
蔵屋敷を思わせる白壁と貼り瓦の外観デザインに浦辺調が表れている

09 ▶p.16参照

第一合同銀行倉敷支店
(**旧・中国銀行倉敷本町出張所**)

設計|薬師寺主計　竣工|1922年
倉敷市本町3

10

旧・大原家住宅

設計|不詳　竣工|1795年
倉敷市中央1
大原孫三郎と總一郎の生家で、倉敷窓や倉敷格子など、倉敷の町家の特徴をよく残す。国指定重要文化財。敷地内は非公開

11 ▶p.11参照

有隣荘

設計|薬師寺主計
設計指導|伊東忠太(和風部分)
竣工|1928年
倉敷市中央1

12 ▶p.08参照

今橋

設計|薬師寺主計　竣工|1926年
倉敷市中央1

13 ▶p.08参照

喫茶エル・グレコ
(**旧・奨農土地株式会社 本社事務所**)

設計|薬師寺主計　竣工|1926年
倉敷市中央1

14 ▶p.14参照

大原美術館本館

設計|薬師寺主計　竣工|1930年
倉敷市中央1

15

大原美術館増築

設計|浦辺設計　竣工|1991年
倉敷市中央1
本館の脇に接続するアトリウムや展示室を浦辺設計が増築した

16

新渓園

敬倹堂修復設計|浦辺設計
竣工|1991年
倉敷市中央1
倉敷紡績の初代社長、大原孝四郎が還暦の記念に建てた別荘で、市に寄付された。結婚式などにも使われる敬倹堂は、浦辺設計が修復の設計を担当した

17

倉敷国際ホテル

設計|倉敷建築研究所(浦辺鎮太郎)
竣工|1963年(本館)、1987年(新館) 50周年リニューアル|2014年3月
倉敷市中央1
水切りの機能をもった庇形が帯のように建物に回るスタイルは、浦辺鎮太郎が日本工芸館(大阪、1960)でも用いた得意の手法。日本建築学会賞受賞

18

大原美術館分館

設計|倉敷レイヨン営繕部(浦辺鎮太郎)　竣工|1961年
地下展示棟増築|1986年
新収蔵庫棟|2009年
倉敷市中央1
敷地の外周部に建てられた建物は、外側から見ると城壁のよう。高梁川の玉石を埋め込んで使っている

19

若竹の園保育園舎

設計|西村伊作　竣工|1925年
倉敷市中央1
工場で働く女性の増大に対応して、大原孫三郎らの援助により開園した保育園。登録有形文化財

20

クラシキ庭苑

設計|倉敷建築工房 檜村徹設計室
竣工|2014年
倉敷市本町5
空き家になっていた古民家を改修し、母屋、離れ、蔵の3棟を飲食と物販の店舗に再生した

21

倉敷館(**旧・倉敷町役場**)

改修設計|浦辺建築事務所
竣工|1917年　改修|1971年
倉敷市中央1
下見板張りの建物は、もともと倉敷町役場だった。復元修理が施されて、現在は観光案内所兼休憩所となっている

22

珈琲館

設計|浦辺建築事務所
竣工|1971年
倉敷市本町4
倉敷川に面して建つコーヒー専門店で、外観は白壁の和風建築だが内部はレンガが基調になっている

23

旅館くらしき改造

設計|倉敷レイヨン営繕部(浦辺鎮太郎)　竣工|1957年
倉敷市本町4
老舗旅館の改築。川沿いのまち並みを強く意識した設計が行われている

24

倉敷考古館新館

設計|倉敷レイヨン営繕部(浦辺鎮太郎)　竣工|1957年
倉敷市中央1
既設の土蔵を転用した博物館の背後に増築された鉄筋コンクリート造の新館で、屋根が二重になっている

25

井上家住宅

設計|不詳　竣工|1711–1716年
倉敷市本町1
美観地区に残る最古の建物。土扉が付いた倉敷窓が特徴。2012–2017年度は解体修理を行うため非公開となっている

26

クラシキクラフトワークビレッジ

設計|倉敷建築工房 檜村徹設計室
竣工|2017年
倉敷市本町1
クラフトワーク(手仕事)をテーマにした複合施設。築170年の伝統的な木造2階建ての町家を再生しつつ、その奥の雑木林を更地にし、中庭をのぞむように3棟増築した中に5店舗が集まる。商品を販売するだけではなく、工房併設型の店舗で製作風景を公開したり、ワークショップの開催を通じて、手仕事の魅力を幅広く発信。倉敷は古くから民藝に縁が深く、手仕事が盛んだという

27

吉井旅館

設計|倉敷建築工房 檜村徹設計室
竣工|1988年～現在に至る
倉敷市本町1
創業250年を誇る老舗の旅館で、営業を継続しながら少しずつ改修を行っている

28

森田酒造・平翠軒

設計|不詳　再生時設計|倉敷建築工房 檜村徹設計室
竣工|明治期(酒造場)、大正期(平翠軒)
倉敷市本町8
美観地区にある黒漆喰の造り酒屋。敷地内には食材のセレクトショップ「平翠軒」がある

29

児島虎次郎記念館

改修設計|浦辺建築事務所
竣工|1906年
改修|1972–1981年
倉敷市本町7
倉敷アイビースクエアの敷地内にある。大原美術館のコレクション創設を担った画家、児島虎次郎の作品とその関連作品を展示。元は紡績工場の製品倉庫。2017年12月末に閉館し、収蔵品は旧・中国銀行倉敷本町出張所に移設予定。登録有形文化財

30

倉紡記念館

設計|不詳
改修設計|浦辺建築事務所
竣工|1888年　改修|1969年
倉敷市本町7
倉敷アイビースクエアの敷地内にあり、倉敷紡績の史料を展示している。元は紡績工場の材料倉庫だった。登録有形文化財

31

倉敷アイビースクエア

設計|石河正龍・島田覚人　再生時設計|浦辺建築事務所
竣工|1974年
倉敷市本町7
倉敷代官所跡地に建てられた紡績工場を、ホテルとして転用した。赤レンガの建物が広場を囲んで建っている。日本建築学会賞受賞

32

倉敷市民会館

設計|浦辺建築事務所
竣工|1972年
大規模改修|2009年
倉敷市本町17
美観地区に隣接して建てられた本格的なコンサートホール。外観は飛び立つ鶴の姿とも形容される

33 ▶p.18参照

檜村徹設計室「創想舎」

設計|倉敷建築工房 檜村徹設計室
竣工|2000年
倉敷市東町1

34

夢空間はしまや

設計|倉敷建築工房 檜村徹設計室
竣工|1997年
倉敷市東町1
江戸期の藍染屋の再生。楠戸家住宅が1996年に文化庁の文化財登録原簿に岡山県第1号として登録されたことを機に、米蔵を改装して誕生したカフェ&ギャラリー。カフェスペースは2階が吹き抜けとなっている。オープン20周年を迎えた今年3月、はしまや呉服店の隣にある洋間を再利用し、ギャラリーに続く2つ目のアートスペース「Art Space はしまや」も開設した

35

倉敷市芸文館

設計|浦辺設計　竣工|1993年
倉敷市中央1
演劇やコンサートの上演施設。大山名人記念館を併設し、周囲の空地と一体化した設計が施されている

36

楠戸家住宅「はしまや」

設計|不詳
竣工|1887年ごろ
倉敷市東町1
楠戸家は江戸期に紺屋、明治以降は呉服屋を営む倉敷を代表する商家で、「はしまや」はその屋号。檜村氏の事務所とは敷地内で反対側にあり、旧街道(本町通り)に面する。
市指定重要文化財

37 ▶p.08参照

無為堂

設計|薬師寺主計
意匠|児島虎次郎　竣工|1926年
倉敷市酒津 ※非公開

38

倉敷駅前再開発事業 東ビル
(**現・天満屋倉敷店**)・**西ビル**
(**現・倉敷シティプラザ西ビル**)

設計|浦辺建築事務所
竣工|1980年
倉敷市阿知1
百貨店やホテルが入った再開発ビル。駅前に向かい合って2棟が建つ

39

日本基督教団倉敷教会教会堂
(**旧・倉敷基督教会**)

設計|西村伊作　竣工|1923年
倉敷市鶴形1
大原孫三郎や林源十郎らによって創立、外壁には岡山県の北木島で採れる北木石が使われている

[写真:編集室]

40 ▶p.09参照

倉敷中央病院(**旧・倉紡中央病院**)

設計|薬師寺主計(建築顧問)+隅田京太郎+武内潔真
増改築設計|浦辺建築事務所
新5棟設計|UR設計
竣工|1923年
増改築竣工|1975–1981年
新5棟竣工|2012年
倉敷市美和1

41

蔵ぷ～ら

設計|倉敷建築工房 檜村徹設計室
竣工|2001年
倉敷市阿知3
旧小河原家の母屋と蔵をレストランに再生した。用水に架かる橋を渡って中庭へとアプローチする

42

倉敷ユースホステル

設計|倉敷建築事務所(浦辺鎮太郎)
竣工|1965年
倉敷市向山1537
美観地区の南に位置する向山公園にある簡易宿泊施設

43

倉敷市庁舎

設計|浦辺建築事務所
竣工|1980年
倉敷市西中新田640
シンボリックな塔を備えた高層棟と低層棟からなる。様式的なデザインを各所に配した華やかな建築

44

倉敷市歴史民俗資料館
(**旧・倉敷幼稚園園舎**)

設計|江川三郎八
竣工|1929年　復元|1981年
倉敷市西中新田669

寺子屋で使われた教科書などが展示されている。木造平屋の擬洋風建築で、中央に八角形平面の展示室がある。登録有形文化財